

一ある名君、始めて入國ましくける時國に在りける役人夫々に命じ、壁をぬり直し、疊をかへ、腰張等きらびやかにいたし、泉水、築山迄の花麗を盡しけり、其日に至りしかば、太守機嫌よく入城ましくけるに、木綿布子に同じ木綿鼠に染めたる紋付の單羽織、馬のりあけたるを召し給ひ、馬に打ち乗りて城に入らせ給ふ、町在のもの、今日ぞ殿様入部也とて、見物山の如くなりしが、右の體を拜見して肝をけしたりとぞ、太守入部の後、幾程もなくして庭を潰し、築山を穿ちて水をたへ、是へ稲草を植ゑて田とし、自身世話有りて、百姓を呼びて、農のいとなみをさせられ、民の艱難をしり、其年の豊作凶作を量り給へり、又居間の腰張をへがし、松葉紙にて自身張り給へり、是まで前栽に植ゑられし樹木名草までも、望心のものあらば遣はすべしとて、悉く人に賜ひける、疊も琉球表の目の荒きに縁をもとらで用ひられし也、扱入部四五日めに、所の木綿屋にて木綿二反調せられ、小納戸の者を召して、此木綿單衣に仕立度ま、定紋を付けて水淺黄に染めさすべし、我思ふ子細ある間、随分當時はやりなる町と在との紺屋へ、一反づゝ遣はすべしと仰有りければ、奉畏て其通にしたり、時にはやる所の紺屋なれば、人多く入り込みて、右の染物を見て、諸人大に仰天し、殿にはか様なる龜末の品を召され候にや、是を見ては我々が著服大に奢の至り也、嗚呼々々勿體なしとて、皆是を語り合ひ、吹聴して自然に町在迄も、奢を停止しけるとぞ。

〔藝備孝義傳一廣島播磨屋町淨閑

淨閑はもと石州津茂山より出て、はじめ山縣の寺原村に移り、また廣島にきたりて、人にもつかはれぬるが、やうやく身を起し、市店もあまたかひ得て、世並屋市郎左衛門といへり、渠富るに隨ひて、家のおきてを正し、物あきなふにもむさばらずして、人と利をともし、又世の奢風にうつらず、その身齡八十になりて、子のすゝむるにより、始て紬といふものを著たり、その家婚禮の式